■ 研究論文

中原省三の郷土風景論にみる 明治期における郷土風景論の動向

Trend of “Kyodo-Fukei” Discourses in the Meiji Period Based on the Case of “Kyodo-Fukei” Discourse by Nakahara Seizoh

横関 隆登*

Takato YOKOSEKI

Abstract : It remains uncertain when and how “kyodo-fukei” appeared. With the advent of digital archive, it became possible to confirm the existence of “kyodo-fukei” discourses authored by Seizoh Nakahara in “ryu-nankai” magazine published in 1910. It is possible to suggest that “kyodo-fukei” discourses by Seizoh Nakahara are effective materials for tracing the beginning of “kyodo-fukei” discourses in the Meiji period. Therefore, this study aims to clarify the concept and establishment factors of “kyodo-fukei” discourse by Seizoh Nakahara, and to consider the trend of “kyodo-fukei” discourses in the Meiji Period. As a result, it became clear that “kyodo-fukei” discourses were more likely to have appeared after the middle of Meiji period or before the Taisho period; in other words, “kyodo-fukei” discourses were thought to have appeared in the late Meiji period. From the establishment factors of “kyodo-fukei” discourses by Seizoh Nakahara, the formation of “kyodo-fukei” discourses in the late Meiji period can be arranged as follows: 1) recognition of “kyodo” as a place concept, 2) acquisition of modern literary knowledge, and 3) interest in sightseeing spots. In addition, as a conclusion of this study, Seizoh Nakahara’s “kyodo-fukei” discourses were positioned as historical materials in landscape planning studies.

Keywords : *kyodo-fukei, alumni association, Seizoh Nakahara, Zensuke Tanaka, Chikkyo Ono, Tsuyoshi Tamura*

キーワード : 郷土風景, 校友会, 中原省三, 田中善助, 小野竹喬, 田村剛

1. 研究の背景と目的

近年の風景計画の実践では、景観法の理念に見られるように、地域の固有さを比較的に重視しており、基礎自治体の取り組みが尊重されている。そこで、風景における価値に着目すると、誰もが共有するような価値とある特定の地域で共有しているような固有な価値など価値には尺度が存在することが思い出される。風景における価値の整理は、風景計画学における研究課題として重要性を高めているといえる。風景は歴史や社会経済等を含めた文化的な産物であるため、風景の価値が歴史的に形成された経緯を検証すること自体に意義がある。しかし、ここから踏み込んで風景における価値の尺度に着目した研究を展開すべきである。風景における価値の尺度への理解を深めることは、風景計画学上の風景の計画性を高めるための重要点のひとつに位置付けられる。

明治維新後から明治中期の明治憲法体制の確立までの地域社会は、国家が主導する近代化の浸透過程にあり、土地や財産を所有するなどの勢力のある農家や近代的産業を興した名望家が国家的な行政よりも民衆に影響を与えていた。維新後の廃仏毀釈などの社会的混迷の中で、政府は民衆が遊観する土地を保存するために、1873（明治6）年に明治六年太政官第十六號の布達、いわゆる太政官公園（人民輻湊ノ地ニ公園ヲ設ルヲ以テ地所ヲ撰擇候セシム¹⁾）制度の設立や、1897（明治30）年に「古社寺保存法」の制定などを実施した。その一方で、遊観地をめぐるのは日光や京都、奈良などの地域で、名望家をはじめとする民間の保勝組織の立ち上げや実践活動が始まったことも着目すべき点である。特に名高い梅林の広がる奈良・月瀬²⁾の保勝会³⁾では、保勝活動家・田中善助によって、全国の問題として風景地の保護の必要性が認識されていた。田中はこうした思いを請願書に取りまとめ、1893（明治26）年に帝國議會へと届けた⁴⁾。また、志賀重昂は1894（明治27）年に『日本風景論』を上梓し、日本全国では国家という範囲の普遍的な風景の価値が登場して普及し始めていた⁵⁾。これ

らの風景論が登場したいわゆる明治20年代は、二葉亭四迷や国木田独步らの文学に象徴される言文一致が確立したとおり近代的な風景の見方が確立した時期ともいえる⁶⁾。そこで風景における価値の尺度が形成された明治中期までの時期は、黎明期に位置付けられる。その後、日露戦争が終戦を迎えた1905（明治38）年、すなわち明治末期初頭には、国民の家計が人口減少や物価上昇、苛税などから圧迫されて窮乏しており、政府は国民生活ひいては地方の立て直しを画策した。例えば、内務省地方局は、地方自治や社会行政等のあり方を模索し、1907（明治40）年には内務省官僚井上友一と有志によって『田園都市』が上梓された⁷⁾。そして政府は戊申の年、1908（明治41）年に詔書を発布、いわゆる戊申詔書を発布し、地方における地域社会の再編が官製運動として政府と外郭団体・報徳社によって進められた。このいわゆる地方改良運動⁸⁾は多岐にわたる具体策が施されたが、特に自然的に発達していた村落コミュニティを行政区域として統合したことなどが知られている。新たに誕生した行政区域は、民衆にとってのコミュニティ単位には直ちにならず、同時期には明治期に入ってから既に実施されていた郷土教育が新しいコミュニティの形成手段として重宝された。

郷土を冠した風景は「郷土風景」と呼ばれているが、近代にはその取り扱い方が議論された⁹⁾。しかし、これまでの既往の知見では、郷土風景の存在を認めながらも初出や普及を主題とした検証は進められなかった。そのため、郷土風景論がいつどのようにして登場したのか、その存在が不確かなままで今に至っている。それでも既往の知見を整理すれば、郷土風景概念が生成した時期は、大正前期に見出せる。例えば、画家小野竹喬は出身地の風景を主題に取り上げた絵画¹⁰⁾を文部省が設置する公募型的美術展に出展し¹¹⁾、また造園学者田村剛は天然公園の設置対象として郷土風景に着目して農商務省に認可された山林系団体の専門雑誌で論考を発表した¹²⁾ことが挙げられる。さらに遡って明治末期

* 東京大学大学院農学生命科学研究科

の地方改良運動に着目すれば、先述した井上友一は、中央報徳会から出版された図書『自治之開発訓練』（1912）にて「歴史に關聯して風景のことを一言する必要がある。是も其保存を要するものは矢張り其郷土を愛する精神を養ふ所以である。」と、不完全ながら郷土と風景とのつながりの強い言説を残している。そして、近年普及したデジタルアーカイブによって遡ってみれば、第五高等学校の在学中の中原省三が1910（明治43）年に刊行された校友会誌『龍南會雜誌』上にて郷土風景論を発表している。この1910（明治43）年とは、史蹟名勝天然紀念物保存協会が設立した1911（明治44）年、並びに天然記念物保護制度に關連する國際會議に政府から派遣された関係者が出席¹³⁾した報告が刊行された1912（明治45）年の以前にあたる。したがって、中原による郷土風景論の価値は、中央で推進された史蹟名勝天然紀念物保存の文脈、郷土保護の文脈から自明なものとして看過することはできない。研究対象に取り上げ、その言説から概念を明治末期という時期の背景ともからめて読み解く必要がある。そればかりか中原の郷土風景論からは、これまでに不確かであった明治期における郷土風景論の動向を窺い知ることができる可能性も示唆できる。明治期の郷土風景論の動向が明らかになることは、風景における固有な価値の尺度への理解を深める作業として、風景計画学上の意義を持つといえる。

そこで本研究は、以上で述べてきた風景計画学上の問題意識から、中原省三の郷土風景論を対象に、その概念を明らかにし、明治期における郷土風景論の動向を考察することを目的とした。

2. 方法

主な対象は、中原省三（1889-1973）¹⁴⁾が著した論考「郷土風景趣味を説き延いて信州の山嶽草味景に及ぶ」（以下、適宜中原の郷土風景論とする）とした（表－1）。中原は、長野県長野市（1959年時点の呼称）¹⁵⁾を出身地とし、第五高等校を卒業した後、東京帝國大学工科大学へと進学して応用化学を修め、その専門性から三菱財閥系の民間工業製品メーカーに勤務¹⁶⁾し、近代日本におけるソーダ工業¹⁷⁾の発展に尽力した化学技術者として知られている。また、中原の郷土風景論を手掛かりに明治期における郷土風景論の動向を考察するため、中原の郷土風景論の前後に発表された風景論を考察に向けての補助線として対象に加えた。具体的には先述した明治中期における奈良・月瀬保勝会の保勝活動家・田中善助（1858-1946）の著述や大正前期までに郷土風景を主題的に取り上げた画家・小野竹喬（1889-1979）の作品（なお、「竹喬」とは雅号であるが、1923（大正12）年までに「竹橋」という雅号を用いていた。以下、適宜竹橋とする）、造園学者・田村剛（1890-1979）の著述を選択した。田中による風景論は、月瀬保勝会に關連したものを抽出した。竹橋による大正前期までの絵画は、『小野竹喬大成』¹⁸⁾、『小野竹喬展生誕120年』¹⁹⁾に収録されたものから郷土風景という言葉を表題とした作品を抽出した。ただし竹橋は、「郷土風景」と呼ばれる素描を明治末期頃と1917（大正6）年に残したとされるが、これらの素描は表題を決定した年月が定かではないこと、竹橋による意図が不明なこと、作品「郷土風景」と比べて世に知られるものではないことから除外した。田村による大正前期までの著述は、できる限り収集した36点²⁰⁾から、表題および本文レベルで郷土風景という言葉の使用が認められた著述を抽出した。

分析は上記した対象に従って実施した。まず、明治末期の中原による郷土風景概念を3章で論じ、続けて4章では中原の前後に発表された風景論について言及した。後の5章では、3章と4章の関係を比較し、中原の郷土風景論の歴史的位置付けや明治期に生成された郷土風景論の動向について考察した。

表－1 対象とした著作物

時期	著者	年月	表題	雑誌/出版社/審査会
明治中期 (中原以前)	田中善助	1892 (M25) .11	風景保護請願書	私製（原文は同年12月発行『亞細亞』69, 18-19の掲載内容を参照）
		1903 (M36) .3	月瀬獨案内	月瀬保勝会, pp42
明治末期	中原省三	1910 (M43) .2	郷土風景趣味を説き延いて信州の山嶽草味景に及ぶ	龍南會雜誌 134, 53-61
大正前期 (中原以後)	小野竹橋	1917 (T6) .10	郷土風景	第11回文部省美術展覽会美術審査委員会（日本画部門）(175.0×170.0cm, 絹本着色)
	田村剛	1918 (T7) .8	府縣立公園と郷土風景の保存	大日本山林會報 (429), 16-20
		1919 (T8) .11	独逸十九世紀に於ける風景的造園論	『庭園鑑賞法』所収、成美堂書店, 162-173

3. 明治末期の中原省三による郷土風景概念

熊本の郊外にかけて広がる龍田山の南方に立地する第五高等学校は、校友会を「龍南會」と名付けた。この校友会での校友活動の一環として企画された会誌は、『龍南會雜誌』（以下、適宜会誌とする）といい、「五高の文化活動の中心」²¹⁾的な役割を担っていた。会誌は広範に流通したものでは無く校内の教員や学生に向けたメディアであり、あくまでも限られたコミュニティから親しまれていた性格がある。在学時の中原は、会誌の発行元である龍南會にて、総務委員を務め、部活動に必要な活動資金の管理などの職務²²⁾を経験した。そのため、中原は校友会を通じた学内自治活動に積極的であったといえる。会誌は、論考を「論説」、「雑録」、「文苑」、「翻訳」、「雑報」の五つに分けて掲載していた。中原の郷土風景論は、「雑録」に該当する論考である。「雑録」に区分された論考の性格は、高尚な「論説」や作品的な「文苑」と異にする著者の思う事柄を気ままに綴る自由闊達さがあった。中原は身近なところに論考を発表する場があったが、会誌にて中原が発表した論考は、郷土風景論のみであった。中原は後に化学技術者となり、数多くの技術的な著作物を残したが、自身の思う事柄を公の場に表すことは生涯を通じて積極的ではなかった。そのために、中原の郷土風景論とは、中原自身にとっての異例であったといえる。中原の郷土風景論は、1909（明治42）年9月に投稿され、1910（明治43）年2月28日に刊行された会誌に掲載された。この期間前後の中原といえば、1909（明治42）年に理系教育を中心とした第二部第三年甲組に所属し²³⁾、翌年1910（明治43）年に卒業²⁴⁾、東京帝國大学工科大学へと進学した。中原が郷土風景論を著した動機は、会誌の性格や中原自身の文筆活動への意欲、投稿時期から総合的に検討すれば、個人的な理由に支えられていたといえる。そこで言ってみれば、中原の郷土風景論とは、卒業間近であった中原が龍南會に何らかの足跡を残すために著した論考、つまり卒業記念文に位置付けられるだろう。

中原の郷土風景論の論理的構成は、表題と見出しに端的に表現されている。すなわち表題でいう「郷土風景趣味」を見出しの「一、名所風景」から「二、郷土風景」、「三、海、野、山」にかけて説き、表題でいう「信州の山嶽草味景」を見出しの「四、信州」にて言及していた。本文レベルでの郷土風景という言葉の使用箇所は、一章から三章にかけて9箇所に認められ、四章では1箇所の使用に留まっていた。四章の見出しとした信州とは、中原の出生地を指し示す場所であり、ここで中原は郷土風景という言葉を使わずに自分と所縁のある信州各地を讃え、読者に来訪を薦めた。以上から、中原が郷土風景論を発表した意図は、出生地信州の魅力を読者に伝えることであり、その魅力を共有する前提条件となる郷土風景概念を一章から三章にかけて説明し、それを自明とし

て四章では信州を魅力的に論じたといえる。

「一、名所風景」から「二、郷土風景」、「三、海、野、山」にかけて説明される郷土風景概念とは、大まかには郷土という生活域を単位とする風景概念であった。中原は、郷土風景を第五高等学校周辺にある名高い景勝地、具体的には水前寺、成趣園や江津湖など対比して「郷土風景とは名所風景よりは規模の大なるもので畫家などの所謂背景其物である。」と説明し、名所風景と郷土風景の概念に差異を求めた。つまり、この郷土風景概念は、旧来の名所から脱して発見した風景であるが、風景という意味からは両者とも同じ範疇にあることを示している。中原は郷土風景が成り立つ要因に、「空氣、地質、地勢、氣候。これらを因子として各地方には其地方特有の風景が成立つ。」と地理学的に考察を加え、その「例を九州にとれば、一般に低い山に囲まれた廣い平野が見事に開かれて居て、空は多く溼氣を含んでると云ふのが、熊本、久留米、佐賀邊の郷土風景である。」と第五高等学校の周辺域を例示した。その一方で中原は、郷土風景に接したときの感情を「誠に心の奥底から他郷と故郷とを痛切に感別する」と述べており、現在の居住地とは異なる故郷や他郷の存在との相対的關係性に言及した。したがって、中原の郷土風景概念の適用範囲をより具体的に示すならば、中原にとっての意味のある出生地や現住地、現住地で回想した出生地、旅先の土地、旅先で回想した現住地であり、かつ盆地・平野のような広大な可視範囲や信州のような県スケールの地理的空間である。また、中原は「僕が「郷土」と此風景に冠らしたのも、かゝる意よりで出でたのである。不知不識の間に感化する程な悠然として逼らぬ大なるものである。」と、郷土風景という言葉で「かゝる意」（先述した名所風景とその周辺に広がる大きな環境のこと）に対して自らの語感から郷土と風景を組み合わせ造語したものと説明した。郷土風景に冠する当時の「郷土」とは、1891（明治24）年文部省令「小学校教則大綱」の学習内容に記載されていたように小学校教育に用いられていた。1889（明治22）年に生まれた中原は、尋常小学校を就学した際、郷土地理として出身地を学習した経験があると想定できる。この点では、中原が読者に想定しているであろう第五高等学校の学生にとって、郷土という言葉だけならば馴染みやすかったと思われる。また、風景に郷土のような地理的空間を冠する造語法は、時代に即してみれば志賀重昂による『日本風景論』（1894）が1903（明治36）年に増訂15版の印刷発行を済ませて普及していたことが著名な先例として思い出される。そして国内では『日本風景論』以降から、小島烏水による『日本山水論』（1905）、伊藤銀月による『日本風景新論』（1910）などの著作物が出版されたように、明治末期には地理的空間を冠する風景概念が生産され、言葉が流布していた。そのため、明治末期では、中原が発想した地理的な郷土という言葉と風景という言葉とを結びつける表現は、唐突でもなく、偶然にも熟す可能性の高い表現法であったと考えられる。しかし、中原が第五高等学校の学生に対して「郷土風景趣味」を説明する必要があったことは、『日本風景論』と郷土風景が異なる概念であったこと、郷土風景という言葉に斬新さがあったことが推し量られた。換言すれば、明治末期における郷土風景という言葉や概念は、郷土と風景に分ければ郷土教育の知識や『日本風景論』の語感と類似するが、組み合わせることが創作的であったと考えられた。したがって、明治末期に郷土風景という言葉は、ほとんど使われていない新しい言葉であったといえる。

「四、信州」では郷土風景概念が自明となり、中原は出身地信州の魅力を論じた。ここでは、中原が執った風景の描写法に着目すべき点が見られた。例えば、長野・小諸に対する描写では、汽車の車窓からの風景として山へは「山々から吹き下し吹き上す雲や霧。」などと自然現象と共に動的に描き出し、千曲川については「かゝる風光は島崎藤村の「破戒」の中に描かれて在る。」と

近代文学作品を引いて修飾した。中原による描写は、車窓の他にも、乗り合い馬車や歩行体験での場面にも及んでおり、動的な風景を好んで選択したといえる。さらに中原は、浅間山での登山体験に基づき「路が分れる所である。人が来る。『お（原文変体仮名）疲れエー』とこつちから挨拶をする。向も全じ挨拶をする。『お（原文変体仮名）山に登るには、どつちさ行つたら好うござすかい』ときくと、そつちと教へて『今夜はいゝお（原文変体仮名）月様ぞい』と愛嬌を云つてスタくと螢がたんて飛んで居た里の方へ行つた。」と鍵括弧付きで会話を写し出した。現在からみれば目新しさがない会話の場面は、当時としては新しい文章表現であり、近代的な教養を基に成り立っていることを指摘できる。したがって中原の郷土風景論は、島崎藤村をはじめとする近代的な文学教養、ひいては近代的な教養に支えられて表出していたことにも留意すべきである。

4. 明治末期の中原省三前後に発表された風景論について

（1）明治中期における田中善助による先駆的な風景概念

江戸後期の月瀬では、染料の材料として欠かせない薫製した梅の果実、いわゆる烏梅が生産されており、梅林は梅の果実を収穫するために広がっていた。ここに訪れた漢学者・齋藤拙堂は、溪谷の山水と山腹に広がる梅花を賞賛する紀行文『月瀬紀勝』を著した。そして月瀬は『月瀬紀勝』をはじめとする文学の影響によって天下に知られる景勝地となった。しかし、明治期に入ると染色技法は進化したこともあって、旧来技法の材料となった烏梅への需要は低下した。村民が数多く所有する梅林は、用途を木炭生産へと変えて伐出するようになり減少の一途をたどった。一方で、明治期に入ると奈良月瀬の隣町三重上野には鉄道駅が開設し、都市部から月瀬への観光ルートが形成された²⁵⁾。三重上野の事業家田中善助は、梅花の景勝地として月瀬を保存することに思い立ち、1891（明治24）年に月瀬で保勝会を結成した。三重上野の鉄道駅は、月瀬への観光客がもたらす経済効果の基盤施設であり、田中にとっての月瀬梅林の保勝活動は、間接的に地元経済の振興も兼ねていた。

田中は、梅林が消失していく事態に対して梅林の所有者である村民への教化を手段に改善を試みた。一方で田中から梅林の名所としての価値を説かれた村民は、保勝の趣旨を解し難く言うことを聞くことも難しかった。この時期に名所の荒廃は、月瀬に限ったことでもなく全国で起こっており、田中は「到處風致を破壊し俗化する状態を黙視するに忍び」ないとこのころ思いから、全国的に名所を保護する思いを1892（明治25）年11月23日に衆議院議長星亨宛てに「風景保護請願書」としてまとめ、地元の代議士に提出した。田中が請願書で主張した風景保護とは、美術品の保護に尽力していた政府に「人の性情は概ね其國山水の雅俗に關す」と風景や山水が美術品を創作するための基盤的な価値を有することを説き、風景や山水が破壊されると美術品の創作にも影響するため、美術品の保護だけではなく風景も併せて保護せよと考えたものであった（表-2）。田中の手元を離れていった請願書は、次のとおり処理された。田中が請願書を提出した当時、帝國議會において審議すべき請願書を選別する請願委員会に、全国各地からの膨大な数の請願書が集まっていた。請願委員会に到着した膨大な数の請願書は、請願委員会での選別を通過することで容易でなかった。しかし、田中による請願書は、政教社が1892（明治25）年12月12日に刊行した『亞細亞』96号上の記者から、「此の一通の風流請願を得易からん、而して此れ實に閑問題として、卓隅に放棄せらるること（原文省略仮名）を免かれざる者なり。」と待遇され、同誌に原文のままで掲載されるほどの別格の評価を得た。同誌の記者は、「幸に委員長に半峰居士あり、至囑す、草々に看過する勿れ。」と田中による請願書を当時の請願委員長高田

早苗（半峰居士）へと直々に囑したと述べている。ともかく田中が作成した請願書は、結果的に請願委員会を通過して、第四回帝國議會の1893（明治26）年2月27日の議事「第十九 風景保護ノ請願（請願委員長報告）」に上げられた。この議事は、帝國議會の議題上では、風景に問題意識を当てた初の議事となった。ただし、27日の帝國議會では審議が滞ったためにこの議事まで順番が回らず、翌28日の議題へ回された。翌28日とは会期の最終日であった。28日に回った議事「第九 風景保護ノ請願」もまた前の議事への審議が滞り、結局のところ審議がされないまま議會は閉会して第四回帝國議會自体も終了した。その後、田中による請願書は、田中による述懐によれば、当時の三重県知事成川尚義の口から国を先駆けたものとして「政府の参考になった」²⁶⁾と好評を得たとされる。また、その後政教社が1893（明治26）年12月1日に刊行した『亞細亞』3巻1号には「日本風景論」という長編作が掲載され、ここの章以下にあたる「餘意」には田中による請願書の主張と類似した「日本風景の保存」が設けられ、名所の破壊される現状に対して保存の必要性が説かれた。さらに政教社から1894（明治27）年10月24日に刊行された志賀重昂による『日本風景論』には、先述の「餘意」を基にしたと思われる「(七) 日本風景の保護」²⁷⁾が設けられた。田中の手元を離れた請願書は、このように処理されたのであった。処理過程を通してみれば、田中による請願書は、政教社および少なくとも三重県知事から待遇されていることから、世に出た言説であり、明治中期における先駆的な風景論のひとつに位置付けられる。

田中は、その後1903（明治36）年に『月瀬獨案内』という観光客に向けた月瀬のガイドブックのような本を月瀬保勝会から刊行した。この本は、見所を主題に記述され、他に宿泊場所や交通手段、お土産なども含む記述が見られる総合性があった。特に見所の紹介の仕方は、奈良月瀬の全体的な特徴やその中での具体的な個々の見所にも触れていた（表－3）。つまり、この本で田中が表現した風景概念は、月瀬と周辺地域にだけに該当する固有な価値であった。

したがって、田中は、風景をめぐる地域の固有な価値や全国各地でも通用する普遍的な価値に理解があり、かつ状況に応じてこれらの価値意識を書き分けることができたといえる。郷土風景論の前史として明治中期に田中のような保勝活動家が存在し、地方の人間が空間スケールに応じた風景の価値を言説にできたことは、着目すべき事実である。しかし、ここまでの田中による言説からは、郷土や郷土風景を主題にしたものは見つからなかった。また、先に触れた志賀の『日本風景論』は、明治期の先駆的な風景論であったが「江山洵美是吾郷」と、身世誰か吾郷の江美を謂はざる者ある。」と「郷」の論点²⁸⁾と「美」の関係を示す有名な一句²⁹⁾から始まるものの、郷土風景という表現は使われなかった。

（2）大正前期における小野竹橋と田村剛による郷土風景概念
竹橋は、1917（大正6）年に「郷土風景」という表題の日本画³⁰⁾作品を文部省美術展覧会へ出品した。この作品で目に留まる象徴的な山容は、岡山・笠原にある古城山（標高60m）から眺めた虚空蔵山（標高258m）である³¹⁾。古城山は、地域における旧跡であるが、竹橋が「子供のころ遊んだ」³²⁾場所であった。後に竹橋は、古城山からの虚空蔵山を「ピラミッド型の山容の見えるのが魅力であった」³³⁾と述懐している。つまり竹橋による作品「郷土風景」は、出生地として認識した町村の規模の風景を描いたものであった。竹橋が表題に郷土風景という言葉を選んだ理由は、鑑賞者に対して絵画の視覚表現の意味を説明するためであると考えられる。竹橋が他の作品に付加した表題とえば、前年1916（大正5）年に文部省美術展覧会から特選の評価を受けた「鳥二作（二作の各表題として早春・冬の丘）」（各150.0×50cm）に見られるように平易な特徴があった。この他の作品にも1916（大

表－2 「風景保護請願書」（1892）の構成

構成	原文
表題	風景保護請願書
本文	我國の俗の温雅にして其人の美術に長すること(原文省略仮名)とは歐米諸國の夙に推す所にして山水の美にして風光の佳なること(原文省略仮名)とは五大洲中未だ嘗て其比類あるとを聞かざるなり某竊に以爲く此二者は實に我神州の華にして又實に國体の美と相映射して赫々として其光を放たしむる所以の要素たらずむはあらざるなりと既に古社名利には保護の恩賜あり近來實物取調の舉あり博物館共進會あり美術學校の設あり而して其美術保護の法悞はらさるは函し奨励の道設けさるはなし某常に喜びて以爲く是誠に國家の慶事なりと而して亦未だ山水の爲に憂ふる所なくむはあらざるなり夫れ丹楓青松の間に煉化の家屋聳に江流溪水に洋風の橋を架す幾何か其境の風致を損せさるむや況や山を崩し岩石を割き樹を截るに於てをや近來土木の盛なる素より其人の性情に源し人の性情は概ね其國山水の雅俗に關す若し我國の山水にして果して俗塵の蔽ふ所とならむか美術何そ獨り之か影響を蒙らさるむ神髓既に失すれば奨励の道其効を奏せず二者既に其美を損ずれば赫々たる國体亦何そ其光りを減せさること(原文省略仮名)なしとせむや某現時の景況を視て憂慮措く所を知らず乃ち書を上りて活眼の賢裁と仰く伏て願くは滿院の嘉納により風景保護の制を立て以て我國の美を完くせられむとと某誠惶頓首謹みて請願す
署名	明治廿五年十一月廿三日 三重縣伊賀國阿拜郡 上野町大字菊町三番屋敷 平民銅鐵造 田中善助 安政戊戌年十月五日生
宛先	衆議院議長 星亨殿

出典：政教社『亞細亞』96號(1892)所収「風景保護の請願」から抜粋
注) 下線は筆者による追記

表－3 『月瀬獨案内』（1903）の構成

構成	原文(見出し)	合計
巻頭	写真(尾山ノ新道路、尾山八谷ノ一 大谷、一目千本玉界亭、月瀬御保勝會事務所、桃香野、五月川の清流)、序(梅花主人)	2
本文	【1】梅谿花信(うめのはなだより)、探勝里程(うめみにゆくみちのり)、人力車賃金、秘勝發揮(よいけしきのあんない)、花間逆旅(つきのせやどや)	5
	【2】眞福寺遠望(しんふくじのゑんぼう)、三學院(さんがくいん)、天神社(てんじんのもり)、大観坂(だいくわんさか)、一目千本大谷(ひとめせんぼんたはたに)、鶯谷(うぐひすたに)、月瀬橋(つきのせばし)、一目萬本(ひとめばんぼん)、雙美山(さうびさん)、裏の谿(うらのたに)、奥の谿(おくのたに)、竜王瀑(りうわうのたき)、天井谿(あまみだに)	13
	【1】探梅餘香(うめみのをみやけ)、曳杖雅客(うめみにきたなだかいひと)、山村生計(つきのせのなりはい)、養香護芳(うめのていせい)	4
	【3】沿途名勝(みちすがらのめいしよう)	1
奥付	印刷日、発行日、著作家發行者、印刷社、賣捌所	5

凡例 【1】：奈良月瀬の全体的見所 【2】：奈良月瀬の個別的見所
【3】：三重上野の個別的見所

正5）年頃に描かれた「宇治白川村」（29.0×21.5cm）と「瀬戸内の春」（148.7×51.1cm）からも竹橋は平易な言葉を選んで表題としていたことが明らかである。作品「郷土風景」は前年に受けた特選といった評価から一転して選外とされたが、これは表題と別問題である伝統的な日本画の表現から逸脱した行為への評価、すなわち日本画の画材で西洋画の表現を探究する筆致への評価であった。少なくとも「郷土風景」という表題が選外の主要因となったとは言い難い。つまり、竹橋の表題は、絵画の視覚表現を支える意味であり、意味を鑑賞者に伝えるための言葉が選ばれたと考えられる。したがって、竹橋が表題に選び取った語感から、大正前期の郷土風景という言葉には、平易な特徴があると推し量られた。

田村は、1918（大正7）年8月に刊行された大日本山林會報上の論考「府縣立公園と郷土風景の保存」と、翌年1919（大正8）年11月に刊行した図書『庭園鑑賞法』に収録された論考「独逸十九世紀に於ける風景的造園論」にて郷土風景という言葉を使用した。前者の「府縣立公園と郷土風景の保存」の内容は、郷土風景を天然公園の保存対象として認識したものである。ここでの田

村は、郷土風景の意味を大らかに「吾人の郷土に於ける風景」と解説している。田村の論考は、風景を対象とする計画性を論じる傾向があるため、郷土風景を自分のものとして論じたのではなく、ある地方の他者にとっての風景という意味から論じたところに特徴がある。そして田村は郷土風景を天然公園の保存対象として認識していた。つまり、田村の言説は、公園や史蹟名勝天然紀念物の脈絡から登場したといえる。また、郷土風景の役割として「吾人の郷土風景に涵養されてゐることは多く言ふを要しない」との愛郷心の存在を掲げた。ただし、この愛郷心は、「愛國心の原動力」とも意識されており、この時代相応な国と地方の関係をうかがえた。なお、この「府縣立公園と郷土風景の保存」という論考は、先月に刊行された図書『造園概論』の「第二章造園發達の趨勢」を精査されたものと見られる。『造園概論』の二章での田村は、「自分は産れ故郷たる岡山地方でその幼時を送つたために、地方の郷土を代用してゐる筈のカシと言へば生きた木を想ふよりも、その利用してある車輛材料を想ひ、マキ（方言）と云へばそれが薪炭材であることを知つて、事實どんなに生育してゐるかを知らなかつたといふ有様であつた。」と、郷土の手つかずな自然の価値を重視しながらも、郷土の固有な生活・生業にも理解していること、換言すれば郷土教育にて取り扱う学習内容への理解も確認できた。そして後者の「独逸十九世紀に於ける風景的造園論」の内容は、ドイツにおける風景的造園の動向を6名の造園家の主張から整理を試みたものであった。郷土風景という言葉が使われていた造園家は「パウエル（Fr. Bauer）のGartenbau und Landschaft-1906」による主張の部分であった。彼に対し田村は「著しく郷土の愛を力説し、且つ實用を尊重して、造園美の根柢（原文ママ）は、郷土の個性より發することを、明確に深酷に主張してゐる。」と要約したが、続けてパウエルの言葉を翻訳したと思われる日本語を記載した。すなわち「從來の風景的造園法は、可成に長い歴史を有するに拘はらず、全くその健全な造園の發達にとつては、悲しむべき迷路を辿つて來てゐた。吾人は先づその久しい迷夢より醒めねばならぬ。從來の造園家は、本統の造園家の友でもなく、又藝術家の仲間でもない。加之故郷の文化や眞正の郷土風景に對する、愛と同情との見解よりするならば、憎惡すべき仇敵である。彼等は一樣に風景美化とか風景開發とかの美名の假面を被つて、この活氣に充ちた我々の風景を、根本より破壊し盡して、何等の感情をも伴はない『風景的造園』てふ型に嵌めようとしてゐるのである。」と、ドイツにおける風景的造園概念の混乱を記したなかに郷土風景という言葉が含まれていた。この郷土風景とは、田村が自分の語彙をパウエルの言葉に当てはめたものであり、田村がパウエルから郷土風景概念を学んだものではない。後者の論考では文脈に登場しただけの言葉であった。

竹橋と田村は、郷土風景という言葉や概念を規定せずに使っていた。この傾向は明治末期の傾向と異なっていたといえる。つまり、大正前期でも郷土風景という言葉には新しさがあると考えられるが、使われ始めてもいたとも考えられた。

5. 明治期における郷土風景論の動向に関する考察

明治中期には、保勝活動家の田中にみられるように風景を論じる主体が地方に存在していた。しかし、調査した範囲では郷土風景という言葉の使用は認められなかった。明治末期には、中原によって郷土風景論が発表された。これは遡れる範囲で郷土風景という言葉の初出であった。中原は出生地や地方の意味として郷土風景という言葉を用いていた。大正前期には、日本画家の竹橋や造園学者の田村が、郷土風景という言葉と概念を特に規定せずに用いた。この傾向は大正前期には、それが使われ始めたこととして着目できた。明治末期から大正前期にかけて郷土風景という言葉と概念が確認された主要因は、中原と竹橋、田村といった明治

20年代に生まれた世代が生い立ちの中で受けた可能性が高い郷土教育からの影響を指摘できる。学校教育のなかで「郷土」概念に触れたこの世代は、地方改良運動での郷土を大切とする風潮のなかで郷土を冠する多岐に渡る言葉を発想できたと考えられる。その逆に、幕末生まれの田中のような世代には、出生地を眺めたり回想することで郷意識や故郷のような郷土に近い感情が芽生えたとしても、その感情を「郷土」やそれを冠する言葉での説明には至らなかったと考えられる。そこで中原の郷土風景論は、明治期の国内における歴史的な脈に即して登場したと考えられた。したがって明治末期は、郷土風景の初出期に位置付けられた。

中原による郷土風景論からは、郷土風景という言葉が中原自身の語感にしたがって使った経緯が確認できた。中原による郷土風景論からは、郷土風景という言葉が外国語から翻訳した形跡が確認できなかった。つまり中原による郷土風景概念は、中原の思いから生成されたといえる。その要因とは3点にまとめることができる。1点目に、中原が郷土を認識する素養として出生地や居住地、旅先などの土地を地理的に捉える教養を備えていたことである。2点目に、中原が風景を楽しむ素養として『日本風景論』や文学作品などの近代的な文芸教養を備えていたことである。3点目に、中原が風景を楽しむ素養として古風な名所への関心を備えていたことである。これら3点の要因が重なって中原による郷土風景概念は生成されたと考えられた。すなわち地理的な郷土意識と近代的な文芸教養を備えた中原は、生活域にある名所を楽しんだときに、名所とその背景にあたる周辺環境にも関心が払われてゆき、この関心に対して郷土と風景を結びつけて「郷土風景」という概念と言葉を生成した、と示唆できる。一方で明治末期という時期を鑑みれば、上記した3点の要因は中原のみに備わる個人的な特性とは言い難く、別の主体にも備わる可能性がある特性であったといえる。そこで予測的に明治末期の国内各地では、郷土風景概念を生成した主体によって、郷土風景という言葉が偶然に自然発生的に成立していたと指摘できる。この指摘は、中原の以前にあたる明治中期には、先駆的な風景論が地方から中央へと挙げられてきた事実があり、ここから時代がさらに下って明治末期にはより多くの主体が時期に即した風景概念を生成してたと考えられるため、妥当といえる。さらには中原の以後にあたる大正前期には、郷土風景という言葉が使われ始めた傾向があり、その要因として時代を遡って明治末期に郷土風景という言葉が生まれていたことを求めることもできるため、妥当といえる。すなわち明治末期の郷土風景論の動向は中原の言説を通して予測が可能であり、それは妥当であるとまとめられた。したがって明治末期は、中原に限らない全国各地の主体によって、郷土風景概念が生成され言葉が使われた傾向があると結論付けられるのである。

以上のまとめとして、本研究の成果からは、郷土風景という言葉の語源を「明治期に国内で展開した郷土教育における郷土という語が基幹となり、明治末期から国内各地で郷土と風景という語と語が結びついて生まれた」と整理した。

6. 研究の総括と展望

本研究では、中原省三による郷土風景論やそれと関連する風景論から風景概念やその成立要因を明らかにし、これらの相互関係を踏まえて明治期の郷土風景論の動向について言及することができた。この成果より、中原の郷土風景論が大正期以降の郷土風景論の展開を論じる上での起点として重要な意味を持つことが明らかになった。そこで、中原の郷土風景論は、校友会誌に収録される雑録であることに留まらない風景計画学における重要資料に位置付けられると考えられる。

地域の風景の多様性を保全するためには、風景に地域らしさを見出す地域の主体にとっての価値の評価が欠かせない。本研究で

取り上げた郷土風景論は、その歴史的規範として応用性があると考えられる。

補注及び引用文献

- 1) 内閣官報局 (1912) : 「太政官」『明治六年法令全書』所収：内閣官報局, 1-39
- 2) 大室幹雄 (2002) : 月瀬幻影 近代日本風景批評史：中央公論新社, pp446
- 3) 高木博志 (1991) : 史蹟・名勝の成立：日本史研究 (351), 63-88
- 4) 中野目徹 (1993) : 「第五章政教社の変貌 第四節「我観」と「風景」の視線」『政教社の研究』所収：思文閣出版, 226-249
- 5) 加藤典洋 (1990) : 日本風景論：講談社, pp333
- 6) 例えば柄谷行人 (1980) : 日本近代文学の起源：講談社, pp219 および木股知史 (1988) : 「イメージ」の近代日本文学誌：双文社出版, pp229 など
- 7) 渡辺俊一 (1993) : 「名著『田園都市』の周辺」『「都市計画」の誕生』所収：柏書房, 41-59
- 8) 歴史的資料には、例えば神谷慶治監修 (1986) : 地方改良運動史資料集成 第1巻-第6巻：柏書房などがある。地方改良運動という言葉は後世に造語された名称である。
- 9) 赤坂信 (2005) : 1930年代の日本における「郷土風景」保存論：ランドスケープ研究 69(1), 59-65
- 10) 内山武夫 (1984) : 小野竹喬作「郷土風景」「村道」：視る (206)
- 11) 前川誠郎ら編 (1990-1994) : 日本美術全集 全24巻および総索引・資料：講談社
- 12) 荒山正彦 (2004) : 「近代日本における風景論の系譜」『<景観>を再考する』所収：青弓社, 81-120
- 13) 石橋五郎 (1912) : 第二回郷土保存萬國會議状況並右關係事項報告：官報 46, 6-7
- 14) 読売新聞, 1973年3月13日朝刊, 23 および朝日新聞, 1973年3月13日朝刊, 東京版, 23
- 15) 五高人物史料刊行会編 (1959) : 五高人物史 開校七十周年記念：五高人物史料刊行会, 174
- 16) 旭硝子株式会社臨時社史編纂室編 (1967) : 社史：旭硝子株式会社, 78, 98, 146
- 17) 中原省三 (1927) : 曹達工業概論：工政會出版部, pp136
- 18) 内山武夫監修・上岡四郎編 (1999) : 小野竹喬大成：小学館, pp291
- 19) 弓野隆之・上岡四郎・徳山亜希子・鶴見香織 (2009) : 小野竹喬展生誕120年：毎日新聞社・NHK プロモーション・NHK ブラネット近畿, pp231
- 20) 収集した大正前期 (1919年) までの田村剛の著作は以下36点である。
[1] 1916(T5). 4 「世界に於ける日本式庭園の位置」農業世界 11(5), 82
[2] 1916(T5). 5 「林業藝術論」大日本山林會報 (402), 6-10
[3] 1916(T5). 6 「造園術ト林學」大日本山林會報 (403), 1-10
[4] 1916(T5). 7 「出雲大社ト造園ノ起源」大日本山林會報 (404), 29-33
[5] 1916(T5). 8 「風致木ノ刈込ト傷害樹ノ手當法」大日本山林會報 (405), 24-26
[6] 1916(T5). 11 「金剛山と其風景開發策」大日本山林會報 (408), 10-22
[7] 1916(T5). 11 「釜山風景の改良策」朝鮮彙報 (11月號), 99-103
[8] 1916(T5). 12 「水原の瞥見」朝鮮彙報 (12月號), 123-125
[9] 1916(T5). 12 「最近世界庭園界の新傾向」趣味之友 (11), 2-11
[10] 1916(T5). 12 「冬の庭園」趣味之友 (12), 2-12
[11] 1917(T6). 1 「片山隆三氏に答へて」大日本山林會報 (410), 21-23
[12] 1917(T6). 4 「造園の起源と藝術としての造園」大日本山林會報 (413), 15-22

- [13] 1917(T6). 4 「飛石の趣味」趣味之友 (16), 74-77
- [14] 1917(T6). 5 「飛石の話」日本評論 2(5), 131-132
- [15] 1917(T6). 5 「建築的造園の眞髓」大日本山林會報 (414), 14-15
- [16] 1917(T6). 5 「金剛山と其の風景開發策」朝鮮彙報 (5月號), 165-175
- [17] 1917(T6). 8 「支那の庭園」趣味之友 (20), 66-69
- [18] 1917(T6). 9 「植物觀相學を應用したる自然式造園に就て」大日本山林會報 (418), 22-24
- [19] 1917(T6). 10 「風景美と造園美と人工林の美」大日本山林會報 (419), 4-12
- [20] 1918(T7). 3 「東西兩京に著名なる歴史的庭園 (上)」農業世界 13(4), 93
- [21] 1918(T7). 4 「東西兩京に著名なる歴史的庭園 (下)」農業世界 13(5), 84
- [22] 1918(T7). 6 「物見山公園設計案」物見山保勝会, pp50
- [23] 1918(T7). 7 「造園概論」成美堂書店, pp270
- [24] 1918(T7). 8 「府縣立公園と郷土風景の保存」大日本山林會報 (429), 16-20
- [25] 1918(T7). 9 「農村公園 - 其理想と設計 -」農業世界 13(12), 50-57
- [26] 1919(T8). 3 「水戸の常磐公園」教育画報 8, 118-121
- [27] 1919(T8). 4 「造園上より見たる櫻」櫻 (2), 46-50
- [28] 1919(T8). 7 「江戸の庭園」武蔵野 2(2), 32-35
- [29] 1919(T8). 7 「庭園偶感」庭園 (1), 39-41
- [30] 1919(T8). 7 「森林公園」大日本山林會報 (440), 1-4
- [31] 1919(T8). 8 「森林公園 (承前)」大日本山林會報 (441), 1-3
- [32] 1919(T8). 8 「実用主義の庭園」成美堂書店, pp536
- [33] 1919(T8). 9 「彦根の樂々園」教育画報 9, 77-81
- [34] 1919(T8). 11 「庭園鑑賞法」成美堂書店, pp312
- [35] 1919(T8). 12 「我が造園界の改造」庭園 (2), 1-2
- [36] 1919(T8). 12 「實用か美か」庭園 (2), 18-19
- 21) 熊本大学五高記念館図録編集委員会 (2007) : 第五高等学校 熊本大学五高記念館図録：熊本大学五高記念館, 68
- 22) 前掲書 15)
- 23) 第五高等学校編纂 (1909) : 第五高等学校一覽 明治四十二年至明治四十三年：梅田平次郎, 88-89
- 24) 第五高等学校編纂 (1911) : 第五高等学校一覽 明治四十三年至明治四十四年：梅田平次郎, 182-183
- 25) 小野佐和子 (1995) : 新聞広告に現された明治時代の月瀬：ランドスケープ研究 58(5), 9-12
- 26) 鐵城會編 (1944) : 鐵城翁傳：鐵城会, pp148
- 27) 志賀重昂 (1894) : 「(七) 日本風景の保護」『日本風景論』所収：政教社, 197-198
- 28) 米地文夫 (2004) : 志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心：総合政策 5(2), 349-367
- 29) 大室幹雄 (2003) : 「『日本風景論』における文学—漢文くずれの散文と風景」『志賀重昂『日本風景論』精読』所収：岩波書店, pp334
- 30) 鶴見香織 (2009) : 「小野竹喬《鳥二作》《郷土風景》について」『図録生誕120年小野竹喬』所収：毎日新聞社・NHK プロモーション・NHK ブラネット近畿, 178-185
- 31) 徳山亜希子 (2009) : 「郷土風景」『生誕120年小野竹喬展公式図録』所収：毎日新聞社・NHK プロモーション・NHK ブラネット近畿, 45
- 32) 笠岡市立竹喬美術館編 (2009) : 「参考資料 竹喬と旅」『生誕120年小野竹喬展公式図録』所収：毎日新聞社・NHK プロモーション・NHK ブラネット近畿, 212-213
- 33) 小野竹喬 (1979) : 自作の解説：三彩 380, 31-33
(2017. 01. 08 受付, 2017. 08. 08 受理)